

軍政下アルゼンチンの移民コミュニティと 「日系失踪者」の政治参加

石田智恵

<要旨>

本論文は、1970年代後半アルゼンチンの軍事政権下で反体制派弾圧の方法として生み出された「失踪者」の大量創出という文脈において、日本人移民とその子孫、およびかれらのコミュニティがどのような位置を占めていたか、また「失踪」にいたった日系人たちの政治参加において出自やネイションはいかなる意味を持っていたのかについて、軍政下の国民社会をコンタクト・ゾーンとして捉えることで考察する。軍部は「反乱分子」とみなした人々を次々と拉致・拘留・拷問しながら、被害者を「失踪者」と呼んで行為を否認することで、社会全体を恐怖によって沈黙させた。この体制はコンタクト・ゾーンそのものを消失させようとするものである。日系コミュニティは、アルゼンチン社会における「日本人」に対する肯定的イメージの保守を内部規範とし、個人の政治への参加をタブーとすることで、軍政に翼賛的なモデル・マイノリティを生み出す装置として機能していた。70年代の若者たち「二世」の多くは「日本人」の規範を抑圧と感じ、そこからの離脱に向かった。重複する国家とコミュニティの規範を破り、別様の社会を求めて政治に参加することは「失踪」の対象となった。「日系失踪者」たちの思想や行動についての周囲の人々の語りから、かれらが身を投じた政治とは、個人の社会性・政治性の否定の上に成り立つ国民の安全保障を拒否し、コミュニティを媒介したネイションへの同一化ではなく、個人の位置を自ら社会につくりだすことで社会を変えるための方法であったと理解できる。

1 はじめに

本稿は、1970年代アルゼンチンの「失踪」をめぐる問題を、人々の「移民」という出自に注目して考察する。20世紀後半の冷戦体制とその終結の影響のなかで世界各地で生じた内戦、紛争、ジェノサイドなどは、多くの場合、人種・宗教・民族といった集団間の差異、不平等をその背景としている。これに対し、多数の人々を「失踪 *desaparición*」させるというアルゼンチン国家による弾圧・虐殺について、マイノリティと総称される社会集団（エスニック集団、人種、民族、移民など語で分類される被抑圧者）の存在は後景に退く。しかしこのことは、アルゼンチンにマイノリティ集団やそれに関する「問題」が存在しないことを意味しない。国民社会の次元では関心事にならない集団的な差異が、一部の人々にとってのみ問題として経験されるのだとすれば、そのような「問題」の不在そのものについて考える必要があるのではないだろうか。社会問題としては浮かび上がらないがゆえに外部からは見ることの困難な「私的な」現実が、いかに見えないかたちでその社会に位置づけられ、ナショナルな体制に連結しているのか。

こうした関心から本稿は、アルゼンチンで人種・民族的に「アルゼンチン人」から差異化される日系人（日本人移民とその子孫）のコミュニティに焦点をあて、1970年代後半に「失踪」した一部の日系人と、その家族たちの活動を取り上げ、「日系失踪者」とその親族にとって出自の「日系」はどのような意味を持っていたのか、かれらの活動はアルゼンチンの国民社会と移民コミュニティに何をもたらしたのかといった問いについて考察する。

057

2 国民／移民のコンタクト・ゾーン

プラット Mary Louise Pratt [1992] は西洋と非西洋の接触の痕跡として植民地で生み出された旅行記のなかに「まったく異なる文化が出会い、衝突し、格闘する場所」を見出し、それを「コンタクト・ゾーン」と呼ぶことで、支配と被支配の関係を全体化することを批判し、「非対称の関係が存在するなかでの共在、相互作用、絡み合う理解や実践」[Pratt 1992: 7] を拾い上げている（日本語訳は田中雅一 [2007] による）。「接触 *contact*」がピジンなどの混成言語を示す言語学の用語から借用されたように、そこで生じる現象は、異なる背景を持った者どうしが即興的な相互交渉によって絶えずつくり上げていく「無秩序で、非標準的で、構造を欠いた」[Pratt 1992: 6] 性質を持つ。言い換えればコンタクト・ゾーンは、制度化される以前の、ともすれば歴史として語られることなく消えてしまうような出来事の舞台であり、接触する両者が変化にさらされ、既存のものの組み換えが起こる社会空間である。

プラットの議論を人類学的視点から発展的に拡張した田中は、かつて隔たっていた者同士の間での接近、接触がより頻繁に起こり得るポストコロニアルな状況、そしてグローバリゼーションのなかでこそ、コンタクト・ゾーンはいたるところに出現すると述べる [田中 2007: 32]。国境を超える移民は文字通り接触を生み出す契機の一つであり、移民が他者

として参入するのは国民国家を基盤とする社会、国民社会 *national society* である。酒井直樹は、国民的同一性と他者性の一元的な成立に真っ向から対立する典型的な要素として「移民という原則」を挙げている〔酒井 1996：75-77〕。国境の外側の差異を内側にもたらず「移民」と、内側に配分された要素から均質的に想像される「国民」の関係は非対称であり、「強要、根本的な不平等、そして手に負えない葛藤」〔Pratt 1992：4〕を巻き込んだコンタクト・ゾーンを開く。

スペインの植民地支配からの独立を経て、先住民と黒人奴隷の社会的抹消の後にヨーロッパなど各地からの移民を国民化しながら建設された国民国家アルゼンチンは、その当初からいくつものコンタクト・ゾーンを内に抱えていたといえるだろう。そのアルゼンチンにおける移民と国民の問題をさまざまな側面から論じてきた人類学者グリムソン Alejandro Grimson は、ネイション *nación* を「問答の場 *campo de interlocución*」のひとつと捉え、国家 *Estado nacional* は呼びかける者としてその内部に他者の形を与えるが、呼びかけと抵抗の問答を通じて、その社会に固有の差異と同一性の様式が歴史的に生み出されると理解する〔Grimson 2000: 38-41〕。非対称な力の衝突をめぐる歴史的プロセスが展開する「問答の場」とはコンタクト・ゾーンの別名にほかならない。人種や民族（エスニシティ）のような自然的とされる集団と、国民・市民という法・政治的な集団の交錯を解きほぐすことの人類学における重要性を指摘するウィリアムズ Brackette Williams のことばを借りれば、エスニックなあるいは文化的差異の役割は「市民権や忠誠心といった、それぞれの国家の政治的統合の方法のもとで制度化されるナショナリスト・イデオロギーの規範」に埋め込まれている〔Williams 1989：421〕。この制度化されるナショナリスト・イデオロギーの規範が、コンタクト・ゾーンとしての国民社会においてプラットのいう「帝国のまなざし」に相当するだろう。

上記のグリムソンの議論や他のアルゼンチンの移民研究でもしばしば用いられる「呼びかけ *interpelación*」とは、国家のイデオロギー装置に関するアルチュセールの議論、すなわち、それに応答することによって個人が主体化＝従属化し、それを通じてイデオロギーもまた構成されるような、国家装置による「呼びかけ」〔アルチュセール 1993〕を想定したものだろう。1970年代のアルゼンチンにおける「アルゼンチン人」の主体化を要請する国家の呼びかけは、暴力を辞さない権威主義的体制下という点でも、グローバル化があらゆる社会に浸透した現代と比較しても、より強く人々に響いていたと考えられる。本稿では、市民に向けられた暴力を伴うナショナリズム体制下の社会をコンタクト・ゾーンとみることで、呼びかけられたものがいかにその名を引き受け、名乗り返し、自身とともに呼びかけるものにも変容をもたらししていくのかに目を向けたい。次章では、1970年代の軍事政権と「失踪者」の創出について概観し、議論の対象となる文脈を整理する。

3 軍事評議会体制（1976～83年）と「失踪者」

3-1 失踪か沈黙か

1976年3月24日、陸・海・空軍の指導者から構成される「軍事評議会 *junta militar*」はクーデターを実行し、アルゼンチンに非立憲政府を樹立した。1930年の最初のクーデター

以来アルゼンチンは軍政と民政の交代劇を繰り返しており、人々はこの手段に慣れていたといわれる。これに先立つ軍事政権期（1966～73年）に始まり激化していた左翼ゲリラ¹の活動や、第3次となるペロン Juan Domingo Perón 政権（1973年）とペロンの死後を引き継いだ妻イサベル María Estela Martínez de Perón 政権期に多発した準軍事組織「反共産主義同盟 *Alianza Anticomunista Argentina*」、通称「トリプル A」による反政府勢力の暗殺などのなか、アルゼンチン社会の大部分が、政治抗争の終焉と社会の安定化を求めている。ゲリラの鎮圧は軍部に委ねられており、クーデターの可能性は明らかだった。

しかし、アルゼンチン史上最後となるこの軍事政権はそれまでと異なっていた。軍事評議会が掲げた国策「国家再編プロセス *Proceso de reorganización nacional*」（通称「プロセソ」）は、81年まで大統領に就いた陸軍総司令官のビデラ Jorge Rafael Videlaのもと、ペロニズム、社会主義、共産主義思想の拡大を阻止し、西洋的、キリスト教的価値観の回復、国家の安全保障の基盤確立などを主要な目的に掲げ、市民の政治的・文化的活動を著しく制限し、法の統治を麻痺させ、公教育やマスメディアのプロパガンダを通じた日常的な面での心理的作戦にも及んだ [Duhalde 1983; Andersen 1993]。そして「プロセソ」の中心的作戦であり最大の特徴をなすのが、左翼ゲリラ勢力の物理的殲滅を掲げた、いわゆる「失踪者（行方不明者） *desaparecidos*²」の大量創出の方法である。軍事評議会はその武力行使をゲリラの暴力に対し暴力をもって戦う「対転覆活動戦争 *guerra antisubversiva*」と呼び、国家転覆を未然に防ぎ新しい社会秩序を打ち立てるために必要な取り締まりとして、「転覆活動分子」とみなす人々を拉致し、秘密裏に拘禁・拷問・殺害した。「失踪」は、実態が明かされないまま体系的かつ徹底的に行われ、約9000人とも3万人以上とも言われる人々が対象となった。多くの左翼ゲリラ幹部や運動家、知識人、ジャーナリストが国外に亡命を余儀なくされた。「プロセソ」体制の軍事政権が「テロリスト国家」「国家テロリズム」 [Duhalde 1983] と呼ばれるゆえんである³。

この作戦の実行部隊は、突然自宅や職場や通りに現れ、目標の人物を手際よく連れ去り、しばしばその家の物品や金銭、食料品をも強奪した⁴。連れ去られた人々は国内各地に設けられた秘密収容所に拘留され、そこでほぼ全員が拷問を受け⁵、多くは殺害された

1 社会主義革命を目指し武力闘争を展開した当時のゲリラ組織のなかでも、労働者革命党 *PRT: Partido Revolucionario de los Trabajadores* の軍事部門である人民革命軍 *ERP: Ejército Revolucionario del Pueblo* と、モンテネロス *Montoneros* の2つは、政治家や軍人、経済界要人の拉致・暗殺などの目立った活動でよく知られていた。

2 日本語の文献では「行方不明者」も「失踪者」もどちらも訳語として使用されており、どちらも適切と筆者は考えるが、本稿では“*desaparecido*”のもとになっている動詞 *desaparecer* の原義「消える・消失する」に近い「失踪者」を使用する。なお、国際法の領域で「人道に対する罪」の一つに数えられる「強制失踪」(enforced disappearance) [中野 2002] は、「罪」「人権侵害」として批判的に言及する用語であり、ここではよりニュートラルな「失踪」と区別する。

3 この国家テロリズムの先駆的かつ包括的な研究としてドゥアルデの著作 [Duhalde 1983] が挙げられる。杉山 [2007] は米国との国際関係や冷戦期の国際環境に注視しながら、「汚い戦争」が実行に移された過程や軍部の構造を論じている。

4 CONADEP（後述）が証言をもとにまとめた統計によれば、当時いまだ行方不明状態だった被害者の62%が自宅から同居者の目の前で連行され、24.6%が公道で、7%が職場で、6%が大学その他の学校で連行された [CONADEP 2003(1984): 21]。

5 生還した人々の証言から。拷問はこの「失踪」作戦の方法論において不可欠な部分であったとされている [CONADEP 2003(1984): 30]

とみられている⁶。政府は「失踪」への関与を認めず、消えた人々はどこで何をしているかわからないとされた。失踪者の発生はビデラ政権期に重なる76年から79年の間に集中している。被害者の多くは10代後半から30代であり、妊娠中の女性は収容所で出産し、新生児は軍関係者や協力者の非合法的養子縁組に流用された。乳幼児は孤児院に送られ不正養子縁組に出されるか、被害者の家族や隣人宅に預けられるか、一緒に拉致され目の前で親に拷問が行われることもあった〔CONADEP 2003(1984): 24〕。

「失踪者」の大量創出の方法論は、左翼テロリズムを鎮圧するという題目通りの目的を遂行するためのものであるよりも、社会全体を恐怖によって拘束し従属させることで、政治・経済体制を新自由主義的なそれに転換することが眼目だった⁷。マルティネス＝デ＝オス José Alfredo Martínez de Hoz⁸を経財相に起用したビデラ政権は、ペロンが確立した輸入代替工業化政策を基盤とする労働者中心の福祉国家体制にかわって貿易・金融制度の自由化などシカゴ学派の経済政策を導入し、多くの外国資本を呼び込んだ⁹〔宇佐見 2011: 109〕。人々の予想をはるかに超える弾圧は、ピノチェ軍政下チリに次いで導入された「実験」〔佐野 2009〕といわれるこのような経済政策と分かちがたく結びついたものだった。

「失踪」させられた人々の多くが武装したゲリラ兵ではなかったことが、その証左である。拉致の対象になる基準は、ゲリラ活動はおろか、反政府的政治活動への参加の度合いや、参加の有無すら関係なかった。政治活動に携わっていた友人やきょうだいと「間違えて」拉致されたと思しき人や、拉致された理由がわからない人も少なくない。「間違い」で連行されたのか、意図したものだったのかは人々にはわからない。そこにこの方法の本領がある¹⁰。「まず、政府の転覆を図る者を殺す。それから彼らの協力者を殺す。そしてすぐ後に、シンパを殺す。最後に、気の小さい人を殺すつもりだ」(ブエノスアイレス州知事の発言)〔比嘉 2010: 231〕と公言されたように、良きアルゼンチン人である限りにおいて生命・存在が保障されるが、誰がそうであるかが分からない以上、ほんのわずかな疑いすら持たれてはならない、何が理由で失踪者にされてしまうかもしれない。その事実は人々をいっそう脅かし従順にする効果を持った¹¹。自分が隣にいる人物に「反乱分子」

6 殺された人々の遺体の一部は *NV* (*ningún nombre*、無名) として集団墓地に埋葬された。海軍は、秘密収容所として使われていた海軍工科学校 (ESMA: *Escuela de Mecánica de la Armada*) の収容者を飛行機に乗せ生きたまま上空から海に落とすという方法で2年間にわたり毎週15人から20人(計約1500人から2000人)を殺害していた。このことは、同任務に従事した一人である元海軍大尉シリング Adolfo Francisco Scilingo によって明らかにされた〔Verbitsky 1995: 29-32, 60〕。

7 実際には二大主要ゲリラ組織のERPもモントネロスも1975年末の時点ですでにかなり弱体化しており、その幹部は政権篡奪前に軍の諜報部と通じていたとされる〔Andersen 1993: 13〕。

8 マルティネス＝デ＝オスは軍人ではなく、アルゼンチンの伝統的な大土地所有エリート階級の民間結社「アルゼンチン農牧協会 *Sociedad Rural Argentina*」、すなわち、ペロニストの殲滅を謳う軍事評議会と利害を一にする勢力の代表だった。

9 1980年ごろには金融機関の破綻が相次ぎ、累積対外債務や財政赤字の増大を招いた軍政の経済面での威信の低下が顕著になっていた。1982年に勃発するマルビーナス戦争(フォークランド紛争)はそうした軍政に対する不満、不信を排する苦肉の策だった。なお、新自由主義経済は1990年代にメネム大統領のもとでより強力なかたちで回帰する〔宇佐見 2011〕。

10 実際には間違いもあり、そして間違いは忌避されていなかった〔Duhalde 1983: 146〕。またゲリラ兵や運動家は、偽名を使い、しばしば仲間うちでも他人を装い、家族や知人にも活動への関与を隠したことも、周囲の人々に「覚えがない」ことの理由であったかもしれない。

とみなされるかもしれないという脅迫と監視のなかでは、言挙げせず、見て見ぬふりをすることが最も安全な態度となる¹²。

また政府以外のさまざまな結社、組織も、諸外国政府（各国大使館）も、軍事評議会政府を承認し支持していた。失踪者の友人や家族は、警察、軍部、裁判所、弁護士や教会（聖職者）からさえ協力を得られず、あらゆるセクターに浸透したこの「沈黙」の体制 [Barros 2009] に直面した。こうして、ひとたび「失踪者」になった人を取り戻すことができない社会が作り上げられた。痕跡や情報を得られず弔いすらできない、その個人へのあらゆる働きかけを絶ち、個人の存在そのものを否定してしまうというこの国家暴力の形態は、同時代に同じく米国の支援を受けたチリやウルグアイの軍政などと共通の方法として知られている¹³が、アルゼンチンの場合その秘匿性と短期間での失踪者の数の多さが特徴とされる [CONADEP 2003(1984): 20-21]。

アルゼンチン「プロセソ」軍政期を特徴づけるもう一つの存在が、「五月広場の母たち *Madres de Plaza de Mayo*」である。息子や娘を奪われ、誰の助けも得られなかった失踪者の母親が、子どもたちの情報と帰還を求めて、五月広場（大統領府前広場）に集まり大統領府に向かっての無言の行進を 1977 年 4 月に始めた。「失踪者」の存在が公言されず、集会も禁止されているなか、母たちは自らを危険にさらしながら（実際に数人の「母たち」もまた失踪させられた）、静かに政府への抗議を展開した。この行動から生まれた「母たち」の組織によって、隠されていた国家暴力が諸外国の報道機関や人権団体に知らされ、外からの圧力が加わることで¹⁴、「失踪者」の存在が明らかにされていった。「母たち」は、83 年の民政移管とその後の国内の失踪者の事実解明、人権問題の撲滅という大きな動きの端緒となった¹⁵。

3-2 失踪者の現在性と濃密な過去の記述

第二次世界大戦時のナチスの犯罪への反省を契機とし、戦後から今日まで、国家を超えた価値としての「人権」と国家を超えた犯罪としての「人道に対する罪」が、国連を軸として国際社会に共有されてきた。アルゼンチンにおいても、軍事評議会政権による市民弾圧に対する評価と真実究明への取り組みはこうした国際的な人権問題の枠組みの影響下で

11 「若いというだけで反乱分子の容疑者だった」「通りで友人とすれ違いお互いに気付いていても、目をそらして他人の振りをした」と、当時 29 歳だった仲村実範（注 61 参照）が筆者に語った。また仲村は、国家テロリズムのプレーンと言われたビデラ政権期の内務大臣アルギンデギ Albano Harguindeguy の「100 人殺してそのうちゲリラが 15 人いれば上出来だ」との発言を覚えている。2014 年 3 月 4 日、ブエノスアイレス市でのインタビュー。

12 その状況は「私たちは誰にも否定できないことを知らなかった」[クライン 2011: 127] と回想されている。

13 ジャーナリストのナオミ・クライン [2011] は、ミルトン・フリードマンと「シカゴ・ボーイズ」による世界的な新自由主義政策拡張の残虐な方法を「ショック・ドクトリン（参事便乗型資本主義）」と呼び、アルゼンチンのこの軍事政権やそれに先行してチリで成立したピノチェト將軍率いる軍政の国家暴力をその初期に位置づけている。

14 1979 年には、米国カーター大統領の「人権外交」に後押しされた米州機構がアルゼンチンに事実調査団を派遣しており、これがきっかけでビデラ大統領は拘留していた一部の「失踪者」を釈放した [Partnoy 1986: 16]。

15 「五月広場の母たち」の活動については、Bouvard [1994]、杉山 [2007: 133-164]、林 [2009]、松下 [2010] などを参照されたい。

進められてきた [杉山 2011]¹⁶。いかに安定した民主主義を確立し、過去の暴力に向き合うかという 1970 年代以降の世界的課題をめぐっては、「真実委員会」と総称される取り組みを取り上げた研究（近年は「移行期（の）正義」を主題とする研究）が多く蓄積されている。その代表的な成果の著者ヘイナール [2006] は、「真実委員会」型の取り組みの先駆者として、アルゼンチンの「全国失踪者調査委員会 CONADEP: *Comisión Nacional sobre Desaparición de Personas*」を挙げている。CONADEP は、83 年に民政大統領となったアルフォンシン Raúl Ricardo Alfonsín¹⁸ が就任後すぐに組織したもので、早くもその翌年には、数多くの証言や資料をもとに作成された報告書『決して再び』*Nunca más* が出版され、現在まで売り切れと増刷を繰り返し版を重ねている。これによって拷問・拘留の実態、被害者の多さや残虐さが明らかになり、その後のラテンアメリカ各国における「真実委員会」の取り組みに影響を与えた [Crenzel 2008: 144-145]。

しかし、軍政期から独自に情報収集や情報拡散を行っていた「五月広場の母たち」などの団体からは、CONADEP の態勢やその偏った結論、アルフォンシンの意向などに対する批判も提示され、『決して再び』は「新たな論争の的になった」 [Crenzel 2008: 136]。またその後のペロン党各政権による政策の転換¹⁹が、論争をさらに重層化、複雑化してきた。左派政権が続く近年、「記憶・真実・正義 *momoria, verdad y justicia*」は、国家と市民社会がともに追及すべき最重要課題の一つとして確立しているといえるが、今も「軍政期のほうが治安はよかった」と軍部に理解を示す声も聞かれる。いまだ被害者についてわからないことも多く、係争中の裁判を含めて取り組みが続いている。その意味で「失踪者」は現在の問題である²⁰。

こうした軍政下の人権侵害をめぐる政治的、社会的な過程を対象として、「過去」や「記憶」を主題とする研究群がアルゼンチン内外で形成されてきた²¹。その一端を担うイルブ Claudia Hilb [2010] は、民主化によって語ることが可能になった失踪者の大量創出という出来事の語り方の変遷をまとめている。拷問を受けた当事者の証言によりおぞましい事実が開示された当初、その理解は失踪者（反政府勢力）と軍部を「罪なき *inocentes*」

16 アルゼンチンにおける人権をめぐる（軍政期を含めた）政治的過程についてはシキンクの論 [Sikkink 2008] に詳しい。なお、「人権」という用語はアルゼンチンでは主に軍政、権威／民主主義、失踪者などを論じる文脈で使用され、国際的、一般的な用法よりも意味が限定される傾向がある。この点は稿を改めて検討したい。

17 日本では阿部 [2008]、杉山 [2011] らがそれらを踏まえた代表的なものといえる。

18 アルフォンシンはもともと人権問題専門の弁護士であり軍部の国家暴力の責任追及を掲げて支持を集め、大統領に選出された [杉山 2002]。

19 ここで想定しているのは、メネム大統領（1989～99 年）政権下での免責法に象徴される軍部への懐柔・協調的な対処への「転換」、ネストル・キルチネル大統領（2003～07）による免責法の無効化、再度の軍部の責任追及と真相解明を重要課題とする厳正な態度への「転換」である。現在二期目にあるクリスティーナ・フェルナンデス大統領（2007 年以降）も、夫ネストルと同様の立場を維持している。

20 本稿執筆中の 2014 年 8 月、「五月広場の祖母たち」の会長エステラ・デ・カルロット Estela de Carlotto の孫が発見（特定）された。別の家庭で別の名で暮らしていたが、養子であることを知らされ出生に疑問を持った男性が「祖母たち」に問い合わせ、アルゼンチン同一性権利委員会を通じて国立遺伝情報バンクのサンプルと DNA が照合され、血縁関係が判明した。エステラと孫の対面は「祖母たち」の 36 年にわたる活動が実を結んだ成果として大きく報道された（*Página/12*, 2014 年 8 月 6 日、<http://www.pagina12.com.ar/diario/elpais/1-252358-2014-08-06.html>, 2014 年 8 月 28 日最終アクセス）。

21 70 年代をめぐるその後の議論についてはベセッティ Hugo Vezetti の著作 [2002] ほかを参照。

者と「罪ある *culpables*」者として対極に置かれたちをとったが、しばらくすると、反政府ゲリラと軍隊の暴力的な勢力の抗争として説明する「2つの悪魔論」“*teoría de los dos demonios*”が広まった。そして近年になると、より批判的な視点や当時のミリタンテ *militante*（闘士、政治運動家）の思想に賛同する若い世代などから、両者を歴史上の「善 *los buenos*」と「悪 *los malos*」とする見方が増えているとする。しかしイルブはこれらのいずれの理解の仕方にも満足しない [Hilb 2010: 18]²²。

対してイルブ自身は、南アフリカのアパルトヘイト体制に関する「真実和解委員会」の取り組みと、「和解」を排除してきたアルゼンチンの取り組みを比較しながら、より稠密な、あるいは濃度の高い記憶の記述 *redacción de memorias más densas* を訴える。濃度という語で彼女は、事実の複雑さ、一人の人間が持ちうる明暗、信念の善が結果の悪をもたらす可能性といったものに目を向け、「起こり得たかもしれないことを思考することを妨げない真実」を記述しようとする [Hilb 2010: 105]。また、軍事評議会体制下の弾圧がそれに先立つ 1973 年から 76 年の民主政権期からいかに連続していたかを論じるフランコ Marina Franco [2011] もまた、80 年代に進んだ過去の清算が事実の一側面を全体化していると指摘し、それが公的な認識として長らく浸透していたことに警鐘を鳴らす。

このように、「善と悪」「どちらも悪」といった名指しや単純な筋立てによる責任探しと処罰によって捨象されてきた複雑さを理解する試みが、近年進められている。イルブは「70 年代」の政治に関わったミリタンテの一人として、こうした議論を通じて過去を引き受けている。いっぽう 70 年代アルゼンチンを経験していない私たちもまた、経験し得ないからこそ、それに接近し理解するために濃度の高い真実の記述を模索する必要があるだろう。「アルゼンチン」とは別の名で名指される「移民」たちの失踪は、その濃度を構成する数多の現実の一つにちがいない。

細谷 [2013] は、ペルーの「真実委員会」の実例をもとに、社会が不安定な状況から正常化に向かうときに、大規模な暴力の背景にある根深い抑圧の歴史に根差す先住民という社会集団の不平等な状況が、別の「深刻な」問題によって覆い隠され、不問にされてきたプロセスを明らかにしている。アルゼンチンの「70 年代」をめぐる議論のなかで、そのような差別の問題が扱われることはまれである。民族や人種などの出自の差異は「国家再編プロセス」の関心事でなく、共産主義者や左翼的、「転覆活動分子」であるか否かがまず問われたのは事実である²³。アルゼンチンではそもそも階級と政治思想・党派によって社会が分節化されてきた歴史的文脈を考慮する必要も確かにあるだろう。ペロンが政治の舞台に登場しアルゼンチン・ナショナリズムの主導者となる 1940 年代半ばには、政治の領域で、現在エスニシティと呼ばれている主題はほぼタブーとされていたと言われる

22 内田みどりは、アルゼンチンと同様の失踪事件が多発したウルグアイでは「二つの悪魔」説が今も強く残っていると指摘している [内田 2013]。

23 ただし例外がある。キリスト教的モラルを国民文化の一つとして掲げていた「プロセス」体制において、ユダヤ人は「反乱分子」とみなされ「失踪」の対象となった。ユダヤ人に対する拷問には、ナチスを思わせる鉤十字型の傷を体につけるなどの行為が含まれていた [CONADEP 2003(1984): 75]。ジャーナリストでありシオニストのティメルマン Jacobo Timerman は自身が受けた拉致・拘留・拷問の被害に含まれていたユダヤ人としての差別的処遇を独白している [Timerman 1980]。

[Grimson 2006: 73]。しかし、国民の大部分が世界各地からの移民の子孫であり、出身地の名を冠したコミュニティが存在するアルゼンチン社会のさまざまな場面で、出自 *descendencia* に基づく差異は、確かに認識されている。2章でみたように、その国家のナショナリスト・イデオロギーと対抗的な力との間で、「階級と政治党派に分かれたアルゼンチン社会」が形成されてきたと考えるべきだろう。

加えて、「プロセソ」の通称で知られる軍事評議会政府の国策の名称が「ナショナルな再編 *Reorganización Nacional*」であったことに象徴されるように、ビデラ政権はネイション（ナシオン）*nación* という単語を（ペロン政権の特色であるポピュリズム的なナショナリズムを覆すかのように）「乱用」し、当時の文脈で「ナシオン」は「虐殺体制」を意味するにいたった [Feinmann 2005: 111]。そうであればいっそう、70年代軍政と「失踪者」をめぐる現実を、人権や正義、記憶と歴史といった問題ではなく、国民と移民のコンタクト・ゾーンとして、ネイションの問題として考察することにも意義があるだろう。では日本人移民とその子孫、「ハポネス」であることは、虐殺の体制としての70年代アルゼンチン・ナショナリズムのなかでどのような位置に置かれていたのか。

4 移民コミュニティの70年代

4-1 アルゼンチンの「ハポネス」

日本人移民が数を増やしていく20世紀初頭は、近代国家としてのインフラが整備され小麦と牛肉の輸出による経済成長の只中、ヨーロッパ移民の大量導入により西洋的な国民像を確立するため文学・思想・学術研究・政策や教育などの制度が整備されていく時期に重なる [林 1998: 106-107; Devoto 2003: 279]²⁴。そして移民が到着するブエノスアイレスは、英国資本とフランスの文化を糧としてまさに「南米のパリ」にならんとし、後進的で、貧しい、粗野な移民であることをやめて西洋的な「アルゼンチン人」への同化を人々に迫る「人種のるつぼ」のアナロジーで語られていた²⁵ [Segato 2006: 243-271]。この「るつぼ」の発想には「先住民」や「黒人」や「東洋人」はもとより入っておらず、イタリア人やスペイン人に対する蔑称さえ飛び交うこの大都市で、日本人の相貌は目立っていた。北米などで黄禍論や反日感情が高まっていたことも、華人のまとまった流入がなかった²⁶ アルゼンチンにも伝わっており、当時の邦字新聞も「日本人は、いつ拒否の波に襲われるともわからない」と危機感を露わにしていた [Gómez 2011: 8]。ただでさえ外見が人目を引くため、社会生活においては注目を避け、前に出ない、「おとなしい *perfil*

24 19世紀の指導者たちが目指したアングロサクソンの西洋をモデルとする国民国家アルゼンチンの理想にとって最たる他者とされた先住民・黒人（旧奴隷）は、法的な否認と物理的な虐殺・追放により「不在」にされていた [Segato 2006: 255]。

25 「移民」が国民の多様性の源泉として論じられるのは、周辺の南米諸国からの移民が急増していく1980～90年代になってからであるということは、近年の研究の共通見解である [Caggiano 2005; Grimson 2006]。

26 これはアルゼンチンの日本人移民の状況の特徴づける背景の一つである。その他には、沖縄出身者が多数（全体の7割と言われる）であること、契約・協定移民が少なく単身移住者とその呼び寄せが多かったことなど。

bajo」態度が日本人移民の規範となり、「アルゼンチン化」や「同化」よりも集合的な「不可視化」が目指された [Gómez 2011: 8-9]。

さらにそれは日本帝国政府の移民送出政策にも適っていた。1930～40年代の政府にとって移民は、満洲への植民と同様に「海外発展」事業の一端を担う帝国臣民であり、受け入れ社会からの日本人移民への評価・感情は、植民地帝国日本そのものの国際的地位にかかわるものだった [Endoh 2009]。1917年に発足した「在亜日本人会 AJA: *Asociación Japonesa en la Argentina*」（「亜」はアルゼンチンの略）は、「日本の評価を下げてはならない」という命に従ってアルゼンチンの日本人を統括すべく、当初から現地の日本大使館と密接に連絡をとって組織された。第二次世界大戦前には、AJAを中核としたいくつかの組織とそれらを媒介とした人的ネットワークからなる「邦人社会 *la colectividad japonesa*」（のちに「日系社会」と呼ばれるようになる）²⁷が確立されていたが、特に戦前は、本国政府、大使館、AJAのつながりはコミュニティでの生活に強い影響力を持っていた²⁸。

しばしば「アルゼンチンではハポネス *japonés*²⁹であることは利点である」とかれら自身が口にするように、日本人移民史の当初から存在した肯定的な印象——勤勉、真面目、清潔、誠実、従順、忍耐強い、など一連の語彙で示される——は、日本が経済成長を経て先進国としての国際的地位を確立した1980年代前後に増幅され、現在も維持されている。イタリア人やスペイン人の子孫が「アルヘンティーノ（アルゼンチン人）」を代表する無徴の「マジョリティ」であるのと対照的に、「ハポネスはアルヘンティーノとは違う *los japoneses no son como los argentinos*」のである。このステレオタイプから外れる個人は、コミュニティ内部でも外部でも「ハポネスの顔をしたアルヘンティーノ」ではなく、「アルヘンティーノのようなハポネス」と称される [石田 2013b]。

このように、アルゼンチンで「ハポネス」（およびその他称の訳語としての「日本人」）の名が示すものは極めて限定されている。沖縄出身か本土出身か、一世か二世か、日本語を話すか否かといったコミュニティ内での有意味な差異は総じて無化され、アルゼンチン人一般と「違っている」限りにおいて、ハポネスはアルゼンチン社会にその一員としての位置を占めてきたと言える。「誠実」あるいは「勤勉」「従順」であることが、「アルゼンチン人」をめぐる「問答の場」に形成されてきた唯一の「ハポネス」の形象を示している³⁰。

27 アルゼンチン特有のスペイン語で、移民とその子孫の出自に基づくまとまりは「*la colectividad* コレクティビダー」と呼ばれ、これを本稿では「(移民) コミュニティ」と呼んでいる。現地の日本語で「*la colectividad japonesa*」にあたる単語は「日系社会」だが、かつては「邦人社会」と呼ばれていた。本稿が対象とする1970年代の時点ではこの両方が使用されていた。

28 戦前のAJAとその地方支部の役割には、日本からくる「視察団の世話」や「公館より依頼物件の処理」[ロサリオ日本人会 1975: 38]が含まれていたという。どの日本語学校でも「臣民育成」のため日本全国の学校と同じカリキュラムで教育が行われ、「日本大使館の提唱によって結成された日本語教育連盟の日本の国策に準じた指令に基づいて」「四方拝賀式」「紀元節」などの「国家的祭式」が行われていたことにも、帝国の飛び地としての位置づけが表れている [ロサリオ日本人会 1975: 228]。

29 「日本人」「日本の」「日本的な」を意味するスペイン語。コミュニティのなかでもスペイン語の会話では「日本人」と「日系人」が区別されないことのほうが多い。

30 韓国や台湾、中国本土からの移民が増える1980年代以降、アルゼンチンでも東洋人の存在が無視できないものになると、「ハポネス」には「チーノ（中国人）」や「コレアーノ（韓国人）」ではないという意味も加わった。アルゼンチン人の多くにとって中国人と日本人と韓国人の区別は明確ではなく、東洋系、アジア系（あるいはチーノ *chino*）と一括りにされるのが一般的である。

そしてコミュニティのなかでもこのステレオタイプが再生産されてきた。「ハポネス」に対する印象の良さは、国民社会における関心の低さと表裏一体であり、社会に大きなインパクトを与える集団でないことを意味する³¹。であるがゆえに、それがいつ否定的な印象に転化しないとも限らない。「親やおじいさんの世代が苦勞したおかげで今自分たちはこのように良い評価を受けている。この価値を下の世代に受け継いでいかねばならない。自分たちが壊してはいけない」と口にする人は今も多いが、こうした意識の奥には、先住民の虐殺・社会的抹殺の上にアルゼンチン人の自画像が描かれているという歴史 [Ameztoy 1998] が響いているだろう。

4-2 「二世」の時代

しかし、「ハポネス」の名の継承に疑問、抵抗が示された時期があった。コミュニティの歴史記述で「二世の時代」と呼ばれる 1960 年代から 80 年代にかけて、コミュニティの多くの若者——第二次世界大戦後、日本とコミュニティとの連絡が希薄になった時代に育った世代——は、「ハポネス」の呼びかけに同一化することを拒み「アルヘンティーノ」であると名乗っていた [比嘉 2003]。このことは、一世と二世との対立として表出した。アルヘンティーノであるべき二世にとって「日本人であれ」という親たちの呼びかけは抑圧と感じられ、コミュニティの外で「ハポネス」と名指されることは、アルヘンティーノとしての不完全さを意味した。外からのまなざしを内面化し、「良いハポネス」であることを通じてアルゼンチン社会への参入を命じる親世代の規範は、二世たちには受け入れられない間違った方法だった。ハポネスであることとアルヘンティーノであることは両立しなかったのである³²。

二世や三世という呼び名が表すとおり、移民の子孫³³は、移住の行為なしに、社会に参入すると同時に「移民」に分類されており、その意味で「生得的移民」とも言える。いっぽう、アルゼンチンなどで採用される国籍の規則「出生地主義」のもとでは、移民の子孫は出生の時点から国民（ここでは市民とほぼ同義）の法的地位を与えられている。こうして「二世」は、出自が国民の外部にあることを指摘される点では、移民に出自を持たない国民にとっての他者であり、法制度上は生まれた時から国民であるという点で、移民になつた国民（第一世代）にとって他者となる。

こうした「二世」の位置は、戦争や紛争などナショナリズムが高揚するときにより問題含みとなる。20 世紀初頭、米国に生まれた日本人移民の子どもたちが、太平洋戦争の敵国関係となった 2 つの国家の競合する呼びかけに対し困難な二者択一を迫られたことが思い出される [ホソカワ 1994; 坂口 2001] (cf. [石田 2013a: 105-135])。1970 年代アルゼンチンでは、ラテンアメリカを席卷していた革命への熱気、不安定で無秩序な国内情勢と、そうした社会を抑圧する国家テロリズムというまさに有事の体制が、ナショナルな

31 その指標としてコミュニティの人々はしばしば、ブラジルや米国、ペルーと比べつつ、アルゼンチンには政界や財界などに進出した国民的な有名な日系人がいないと述べる（嘆く）。

32 以上の「二世」の独自の位置については博士論文（第 5 章）で論じた [石田 2013a]。

33 ここでは「移民の子孫」という属性を社会的に与えられることを指しており、その社会で出自に基づく集団に分類されない場合は考慮に入れていない。

境界にまたがって生まれた若者たちに、「日本人」でいられた親たちの保守的な「邦人社会」からの離脱を促していた。

さらに「二世」の葛藤が、社会問題ではなく私的な、個人的な問題として現れるということは重要である。出自の差異は、社会の他のアルゼンチン人たちにとって何の問題でもない。「ハポネス」は差別されるのではなく「違う」と指示されるだけで、その差異の指標となるのは、「顔」に凝縮される自分自身の日本人的な身体である³⁴。差異は自分にある。その差異はアルゼンチン人に至らないことを示す不足や欠如として意識され、「ただのアルゼンチン人 *un argentino más*」になることは、かれら自身が解決すべき問題と捉えられた。こうして自己認識や希望と無関係につきつけられる「アルヘンティーノ」との差異に対し、かれら是对抗的に自己を提示する状況に置かれている。それは、明確な相手のいる闘争ではなく、どのような自己を提示するか、自分自身をいかに変えるかという闘争に向かう³⁵。「失踪者」に数えられている日本の姓を持つ十数人は、この「二世」の世代に該当する。

クーデター前年のある日本の新聞記事は、すでに始まっていた政府による反体制派弾圧について、その犠牲になった二世や左翼的思想犯として逮捕された二世の例を挙げながら次のように伝えていた。

「日本からの移住者が花屋や洗たく屋だけをやっていたころは、政治に巻き込まれることなんてなかった」と一世の古老たちは昔を思い出して嘆く。しかし、二世たちはアルゼンチン社会にとけ込んでどんどん活躍しており、当然のことながらアルゼンチンのきびしい社会環境の波は、彼らのうえにも押しつぶさってきている³⁶。

067

ハポネスの典型的職業として知られる花屋（花卉農家）や洗濯屋（洗染業）に象徴される「古きよき」一世たちのコミュニティが政治と無縁なものだとして、二世たちは果たして「政治に巻き込まれた」のだろうか。ここで私たちは、濃密な過去を記述する一つの視点として、コミュニティ内の「一世の古老たち」と「二世たち」の間の70年代の「政治」をめぐる決定的な断絶を問わねばならないのではないか。

4-3 軍政ナショナリズムと日系コミュニティ

前述のとおり「プロセソ」体制は、「対転覆活動戦争」の名目で日常的・超法規的な暴力と、その暴力に関する「沈黙」という相互監視の体制を社会のすみずみに浸透させた。林みどりは、「五月広場の母たち」の政治的、歴史的意義を論じるなかで、こうした抑圧

34 現地の学士号を取得した日系人のサークル、日系学士協会がまとめた『もうひとつの移民』に収録されたエッセイ「ラテン的同質性」のことは引けば、日本人の「傑出した身体」は「歴史的にラテンの典型になじまないものであった」ため、常に日本人をそれと見分ける「区別符号 *el diacrítico*」として機能している [AUN 1990: 22]。

35 そのような、独自の「自己」の集合性の模索の過程と結実として、「二世」をスペイン語の“*nisei*”に置き換える言論活動を別稿で論じた [石田 2013b]。

36 「日系二世に迫る政治テロ」『朝日新聞』1975年7月13日、東京、朝刊3面。

の体制を覆す「人権のポリティクス」をもたらしたのがなぜ他でもない「母たち」だったのかを示唆している。

国家によって発動されたテロリズムの暴力の原因を個人の内面に転移させ、自己管理をみずから追求する存在へと人間の本性を変えることがめざされた（中略）。そのさい、家族が重要な役割を担わされたのは意義深い。学校や工場といったフーコー流の監禁システムによるコントロールもさることながら、本来は「社会的なもの」の外部に存在するはずの私的環境をコントロールすることに、国家安全保障の基礎が見いだされたことを示しているからだ。[林 2009：90-91]

わが子を反乱分子にすることを防ぐのが家庭の、特に母の責務であるとする構図、「家族の内側への警察的コミュニケーションの拡大」[林 2009：91]によって、母たちは、子を奪われた怒りや悲しみ、恐怖に加えて、「失踪者」を出してしまった監督不行き届きを責められ、「テロリストの母」のレッテルを貼られ、何重にも重なる抑圧にさらされる立場にあった。他でもないそのような「母たち」がまず、「個人の内面に転移させ」られた暴力の原因を国家に突き返したことは無視できない。母たちが最も劇的に実行した「私的な内のことがらを外に向けて折り返す」[林 2009：86]³⁷ 方法は、移民たちがコミュニティ内の私的な問題を国家やその外に向かって提示する形で実践してきた政治の方法でもあると考えられるからだ。

「邦人社会」は、次の点で私的な性格を持った領域といえる。すなわち、日本語＝外国語が用いられ（できることが望ましいとされ）³⁸、食事や習慣、年中行事などアルゼンチンの国民社会で共有されない行為や歴史が共有される。多くの成員にとってコミュニティは休日を通ぐす場でもある³⁹。そこでは「みんな知り合い *todos se conocen a todos*」で、「すべてがみんなに知れ渡る *todos se van enterando de todo*」。特にブエノスアイレス都市部では内婚が奨励されていたことから、親族関係にある者も多い。そのようななかでは結婚、出産、死亡といった人生の転機や、邦字新聞に報じられる大きな事件・事故だけでなく、誰かが日本に墓参りに行ったとか、子どもが有名な学校に通っているといった私的な事実が、口伝えにすぐに広まる⁴⁰。

加えて、「勤勉」「従順」「誠実」なはずの「ハポネス」は「犯罪と無縁」でもある。「日本人は悪い事をしない」「日本人なら信用できる」という言明は、コミュニティにおいてとりわけ重視される外からの評価であり、それを逆転させた「犯罪者は日本人ではない」

37 「私的な内のことがらを外にむけて折り返す」という表現は、「新しい法のドラマ」としての人権のポリティクスのありようを論じるジョージ・ユディセ [Yúdice 2003] から引用されたものである。

38 日本語を解さない、話さない人も「ごめん *gomen*」「お金 *okane*」といったいくつかのスペイン語化した単語はコミュニティ内で使用する。

39 60年代から70年代にかけて、毎週土曜日にAJAの青年部が会館のサロンで開催していたダンスのイベントには、当時のコミュニティのすべての若者が必ず一度は足を踏み入れたと言われる。また県人会や村人会（沖縄出身者については出身の市町村別にも組織がある）ごとの集会やピクニック、バザー、歌祭りなどが日曜日に開催される。

40 以上を含めコミュニティに関する記述は筆者が2009年から2013年までにブエノスアイレスで断続的に行った合計約10か月間の参与観察と60名以上への聞き取りに基づいている。

という発想に直結する⁴¹。そのようなコミュニティはまさに、林のいう警察的コミュニケーションが容易に拡張される社会空間である。

アルゼンチン・ネイションを構成する一部として、「日本」を名乗るコミュニティも、軍事評議会政府の支持を表明していた。実際に、前述したような1970年代という「鉛色の時代」[比嘉 2010]の暗く重い空気を、当時の邦字新聞からうかがい知することは難しい。ある記事には、ビデラ大統領が日本を訪問したことについて当時の在アルゼンチン日本大使による次のような談話が紹介されている。「ビデラ大統領訪日は外交面で成果があったと思っている」「ビデラ大統領訪日のさい同行し、大統領夫妻が大へん清廉な人であると感じた」⁴²。軍事政権の「戦争」の残虐さとは正反対の印象が、メディアを通じて拡散されていた。

国民社会全体がそうであったのと同様に、独自の内部規範を共有する私的な領域としてのコミュニティにも、「沈黙」の体制は浸透していた。そんななかで、コミュニティの誰か——それは多くの場合知人の家族である——が「失踪」したといえ、何か理由があるんだろう *por algo será* という「自業自得のロジック」[林 2009: 91]がすぐさま適用され、「ゲリラ」と同一視される。日系人の「失踪者」のことは、みんなが知っていたが知らないことになっていた。

良いハポネスであることは、こうして良いアルゼンチン人であることに直結していた。日系社会はその意味で、アルゼンチン社会の外部ではなく内部であり、軍事評議会が掲げる規範はコミュニティの規範として、国家の呼びかけはコミュニティの呼びかけとして聞きとられた。今もって聞かれる「政治に関わってはならない *no hay que meterse en la política*」というコミュニティの戒律は、個人を従順なハポネスとしてアルゼンチン国民共同体に統合する呼びかけとなる。しかしこれは文字通り一切の政治への不参加を命じるものではない。1982年のマルビーナス戦争の際にみられたように、国家が要請するときにはコミュニティも政治参加を個人に要請する⁴³。つまりコミュニティは公私の両面を、国民と個人を媒介する装置として機能していたと言える。

こうした国家とコミュニティの規範を破ったとして、少なくとも17人が、コミュニティからも、国民社会からも姿を消されてしまった。人々を失踪者にするという方法は、ナショナル・イデオロギーへの対抗的な振る舞いの舞台としてのコンタクト・ゾーンそのものを消失させようとするのである。しかし現在私たちは、失踪者について黙さず語るという別の人々の対抗的な振る舞いを通じて、かれらがどのようにして「失踪」にいたった

41 ある殺人事件の報道の仕方を例に挙げる。1970年4月28日の『亜国日報』は、沖縄出身の人物がブエノスアイレス郊外で経営する洗染店で、店主が使用人に射殺されたことを報じ、「邦人社会での殺人事件はこれが6件目。うち、加害者、被害者とも日本人のケースはこれで4件目となっている」と付け加え、さらに管轄する警察署の警部が「犯罪の例を聞かないあなたがたの社会で、こういった不祥事が起こったとは?…」と話したことに触れて記事を結んでいる。6件目、4件目、という数が多いか少ないかは判断できないが、破線付きの「邦人社会に異例の殺人事件」という見出しや警部の発言などが、「日本人」と「犯罪」の組み合わせがまれであることを強調している。

42 「清廉なビデラ大統領／邦人社会との接触等」『亜国日報』1980年5月20日。

43 「顔は日本人でも心はアルゼンチン人」などとスペイン語で書いたプラカードを掲げ7000人余りの「邦人」がマルビーナス戦争の「絶対支持」を表明する集会を行った（『亜国日報』1982年5月4日）。他の移民団体がこうした支持を表明していることを背景に、AJAで集会挙行が決議された。ここには対外戦争においてマイノリティを動員する有事のナショナリズムの状況が明確に示されている [cf. Guber 2001]。

のかを知り、かれらの政治への関わりが何を意味していたのかを考えることができる。

5 日系失踪者の足跡

「失踪者」に数えられる日系人で身元が判明している 17 人⁴⁴については、「日系社会失踪者家族会 *Familiares de Desaparecidos de la Colectividad Japonesa*」（以後、「家族会」と略す）に参加する人々やそれ以外の友人へのインタビュー⁴⁵から、またかれらへの取材に基づくいくつかの記述を通じて知ることができる（氏名、年齢等は表 1 を参照）。以下に、かれら個々の思いや行為に共通する特徴をいくつか拾い上げてみていこう。

表 1 判明している日系失踪者 los desaparecidos japoneses

氏名（姓の漢字表記）	拉致された（死亡した）日	年齢（当時）
1 Carlos Aníbal Nakandakare（仲村渠）	1975 年 6 月 26 日 ⁽¹⁾	20 歳
2 Emilio Yoshimiya（吉宮）	1976 年 3 月 25 日	33 歳
3 Katsuya Higa／比嘉勝也 ⁽²⁾	1976 年 8 月 22 日	26 歳
4 Juan Alberto Cardozo Higa（比嘉）	1976 年 10 月 21 日 ⁽³⁾	32 歳
5 Jorge Eduardo Oshiro（大城）	1976 年 11 月 10 日	18 歳
6 Carlos Eduardo Ishikawa（石川）	1977 年 2 月 14 日	26 歳
7 Norma Inés Matsuyama（松山）	1977 年 4 月 8 日 ⁽⁴⁾	19 歳
8 Luis Esteban Matsuyama（松山）	1977 年 4 月 10 日	23 歳
9 Oscar Takashi Oshiro（大城）	1977 年 4 月 21 日	36 歳
10 Ana Amelia Higa（比嘉）	1977 年 5 月 16 日	29 歳
11 Juan Carlos Higa（比嘉） ⁽⁵⁾	1977 年 5 月 17 日	29 歳
12 Juan Takara（高良）	1977 年 6 月 18 日	33 歳
13 Juan Alberto Asato（安里）	1977 年 7 月 12 日	28 歳
14 Ricardo Dakuyaku（大工廻）	1977 年 12 月 6 日	28 歳
15 Jorge Nakamura（中村）	1978 年 5 月 6 日	21 歳
16 Julio Eduardo Gushiken（具志堅）	1978 年 2 月	21 歳
17 Carlos Horacio Gushiken（具志堅） ⁽⁶⁾	1978 年 3 月	21 歳

(1) 死亡した日。クーデター以前に誘拐され射殺された。

(2) 沖縄で生まれ、幼い頃にアルゼンチンに移住した日本国籍者。

(3) 死亡した日。実行部隊によって自宅で殺害された。

(4) 死亡した日。武装衝突のあった場所で遺体で見つかった。妊娠していた。

(5) 日本国籍も保有していた（二重国籍者）。

(6) 身元不明として無名墓地に埋葬されていた遺骨の DNA 照合の結果、2004 年に本人のものと確認された。

（出典：Elias [2010]、『琉球新報』1982 年 2 月 9 日～15 日（すべて夕刊）、FDCJ『3 万人のなかの 15 人の歴史』、『読売ウィークリー』（2002 年 11 月 17 日）、FDCJ メンバーへの聞き取りなどを基に筆者作成。）

44 「失踪」当時の年齢は 18 歳から 36 歳まで（これは国内の失踪者全体の年齢傾向に合致する）で、うち 2 名は日本国籍を持っていた。4 名は現在までに死亡が確認されている。ただしこの 17 人の他にも、近親者による訴えが提出されず確認されていない失踪者がいると推測できる。

45 インタビュー対象者の姓名は本人の承諾を得て実名で表記する。

5-1 ミリタンシア

既に述べたように、失踪者となった人々のなかにはゲリラ活動や非武装の政治活動に全く関わりのない人も含まれていたと言われているが、日系コミュニティ内のプロジェクトとして編纂・刊行された『アルゼンチン日本人移民史 第二巻戦後編』（以後、頁数とともに〔移民史2〕と略記する）によれば、日系失踪者たちは「アルゼンチン市民との違いを特徴づける細い目、黄色い皮膚を恥じることなく、自分の国に対するなすべき社会的な使命感を持っていたことでは共通していた」〔移民史2：441〕⁴⁶。その「社会的な使命感」という共通点は、それぞれが従事していたミリタンシア *militancia*（政党・政治活動、その参加）に示されている。たとえば沖縄で生まれ2歳のとき家族に連れられてアルゼンチンにきた比嘉勝也、通称「カチョ Cacho」（表1の番号3、以後番号のみ記す）は、学生の政治運動の盛んなことで有名なブエノスアイレス大学（UBA）哲文学部に在籍中から、ミリタンテとして学部内でも有名だった⁴⁷。また両親も彼の政治活動に勘づいていた⁴⁸。

リカルド・ダクジャク（14）が政治活動に従事していたことは、親族やコミュニティの知人には知られていなかった。彼は日系人の集まりにはあまり顔を出さず、大学（建築学部）、建築事務所でのアルバイト、ラグビーの練習というハードな生活を送っていたという。そのあいまに政治活動を行っていたとすれば、同じラプラタ市の小・中学校に通った幼馴染のカルロス・イシカワ（6）との関わりからだろうと母親は考えている。その理由は、リカルドがいちど政治運動のパンフレットが入ったトランクをカルロスから預かってきたことだった⁴⁹。両親と同居していたラプラタ市の自宅から拉致されたとき、彼の蔵書も「すべてかき回された」〔移民史2：445〕。

リカルドより9か月前に行方不明になっていたカルロスは、大学の学生運動のリーダーだったことが知られていた。ラプラタ大学医学部の卒業を目前にしてジャーナリズム学科に入学し直し、「ペロン派のボランティアに参加し、貧民街に出かけて医療奉仕を手伝い、パンを配ったりすることに情熱を燃やした。時には大学構内の学生集会で演説することもあった」⁵⁰ というほどのミリタンテだった。

フアン＝カルロス・ヒガ（11）は、UBAで文学を学びながら、当時最も左翼的とされた労働者革命党（PRT）に所属し、運動家としても同年代の日系人にはよく知られていた⁵¹。1973年9月11日、すなわちチリのアジェンデ政権がピノチェ將軍のクーデターにより篡

46 ただしここでは全員で「15人」とされている。クーデター以前に殺害された1人（表1、1）と、『移民史』編纂委員会が家族と連絡をとることができず確認できなかった1人（表1、4）を除いているためである。

47 エルサ・オオシロ、2014年3月20日、ブエノスアイレス市、筆者によるインタビュー。エルサは彼が卒業する直前に同学部に入学しており、特にカチョの演説は人を惹きつけていたことを覚えている。彼女にとってカチョは「チェ・ゲバラのようなあこがれの存在だった」。エルサはホルヘ・エドゥアルド・オオシロ（後述）の姉で「家族会」の現在の中心人物。

48 佐伯泰英「家族たちの叫び：アルゼンチン県人失踪事件を追う 5」『琉球新報』1982年2月15日夕刊1面。両親が経営するクリーニング店にときどきカチョの友人が客を装って洗濯物を抱えて訪れ、彼の部屋で話し込んでいったという。

49 佐伯泰英「家族たちの叫び：アルゼンチン県人失踪事件を追う 3」『琉球新報』1982年2月12日夕刊1面。

50 佐伯泰英「家族たちの叫び：アルゼンチン県人失踪事件を追う 4」『琉球新報』1982年2月14日夕刊1面。

51 エルサ・オオシロ。2014年3月20日、ブエノスアイレス市でのインタビュー。

奪された日、ブエノスアイレスのチリ大使館の前で行なわれたチリ軍部に対する抗議デモで彼に出会ったことを、友人の一人であるアルベルト・オナハは覚えている⁵²。失踪する2年前の1975年5月には乗っていたバスが軍事検問にかかり、そのとき持っていた文芸雑誌を理由に逮捕され、ラプラタ地区の刑務所で2か月間拘留されている。釈放され戻ってきた彼に母親が国外亡命を持ちかけたが、提案が受け入れられることはなかった。その後、彼やその友人たちの後をつけて行動を監視しているらしき男が目撃されており、拉致・失踪の危険性は周囲にも伝わっていた。自作の詩を雑誌や新聞に投稿する詩人でもあったフアン＝カルロスは、日系二世たちの詩作サークルの中心的人物でもあった。当時そのサークルに参加していた崎原朝一は、フアン＝カルロスとは「車で家まで送って行ったこともある」仲だったため、他の二世から「彼と関わるのは気をつけたほうがいい」と注意されていたが、「たいしたことはないと思っていた」。その少し後にフアン＝カルロスは姿を消した⁵³。

フリオ＝エドゥアルド・グシケン（16）の家族も、彼が失踪する5年以上前の高校生のときからすでにマルクス・レーニン主義共産党（PCML）に参加していたことを、後に彼の知人から聞かされるまで知らなかった。だが話し好きで政治への関心は隠さず、「当時の若者としては普通」の左翼的な考えを家族によく語っていた⁵⁴。フアン・タカラ（12）は、兄と同じく「バリバリのペロン党员」で近隣では有名だったと言われる⁵⁵。日系社会失踪者家族会が作成した資料『3万人のなかの17人の歴史』によれば、フアンは1974年に結婚した妻とともに「青年ペロニスタ」*Juventud Peronista*の一員として活動していた。日系失踪者のなかでは最も若く18歳だったホルヘ＝エドゥアルド・オオシロ（5）は、労働者社会党 *Partido Socialista de los Trabajadores* の青年局である進歩的社会主義青年 *Juventud Socialista de Avanzada* に参加していた。姉のエルサは後に何年もかけてホルヘへの足取りを辿り、友人やミリタンテ仲間から家族が知らなかった彼の当時の様子を聞いている⁵⁶。アナ＝アメリア・ヒガ（10）は、仲間の家にかくまわれていたがその仲間とともに連れ去られた。軍の実行部隊は彼女を探しているとき、ふざけるように両目を外側に引っぱって⁵⁷ その外見の特徴を伝えていた [Elias 2010]。実生活のパートナーであり同じPRTのミリタンテでもあったホルヘ・ミゲル・ナーメが1975年3月に失踪して以来、彼女は二度と笑顔を見せることはなかったと、いとこのグラシエラ・アラカキが綴っている⁵⁸。

52 アルベルト・オナハ、2014年3月13日、ブエノスアイレス市でのインタビュー。

53 崎原朝一、2013年9月2日、ブエノスアイレス市でのインタビュー。沖縄出身の崎原は1952年に17歳でアルゼンチンに移住した。現在まで継続して発行されている唯一の邦字新聞『らぷらた報知』の記者・編集者であったが、本稿執筆中の2014年11月4日に死去。

54 フリオの弟、ウーゴ・グシケン。2014年3月15日、ブエノスアイレス市でのインタビュー。

55 佐伯泰英「家族たちの叫び：アルゼンチン県人失踪事件を追う 5」『琉球新報』1982年2月15日夕刊1面。父親自身が「息子はペロン党员でしたからそれが原因で連行されたのだでしょう」と認める「稀有な例だった」と記事は追記している。

56 エルサ・オオシロ。

57 「日本人」あるいは「東洋人（チーノ）」の顔を示す典型的なしぐさ。

58 『3万人のなかの17人の歴史』（前掲）より。

5-2 「転覆的」職業

政党活動の他にも、職業との関わりから強制失踪の対象となったと考えられるケースがある。オスカル（タカシ）・オオシロ（9）の場合はそれが特に明白である。というのもオスカルは労働法を専門とする弁護士で、工場の顧問弁護士を務めていたが、自身の法律事務所から連れ去られたのは、彼が労働者側の弁護士として他でもなくマルティネス＝デ＝オス経財相を相手取って訴訟を起こした頃だったからだ⁵⁹。

前述のとおり学生運動家であり文学者であったフアン＝カルロス・ヒガは、当時発行されていた邦字新聞『亜国日報』のスペイン語版担当記者として、また洗染業者組合やその他のコミュニティ関連の活動に積極的に参加していたことで、コミュニティの有名人だった。彼とともに『亜国日報』の記者の仕事をはじめた仲村実範は、郊外からブエノスアイレスに移り大学に通い始めた1970年頃、「20万人のミリタンテ、5万人のゲリラがいる」と言われる政治的環境のなかで左翼思想に共感し始め、フアン＝カルロスともそうした考え方の共通点から親しくなった。仲村はペロン大統領の死（1974年7月）の後に政治活動から距離をとり、『亜国日報』もやめた⁶⁰が、フアン＝カルロスは政治活動をさらに深めていき、次第に関係は疎遠になっていったという。彼が「失踪」したことを仲村はずっと後になってから人づてに知った⁶¹。PRTでのミリタンシアや詩作・文学サークルのような活動も拉致対象に挙がる要因として十分だったが、ジャーナリストであったこともまた大きな要因の一つとなるだろう。

フリオ・グシケンもジャーナリズムを学ぶためプラタ大学に入学したが、彼は1年で大学を中退し、その後は繊維の工場で働いていた。当時のミリタンテの多くは労働者として生きるべきだと考え、実際に工員として働くことを選ぶことが珍しくなかった。フリオの弟で家族会に参加しているウーゴは、フリオが大学をやめて工場労働者となったのもその信念からであったと、フリオと同じグループにいた人物から後に聞いている。その上フリオは工員の代表を務めており、そのことが失踪の要因になったと家族はみている⁶²。フアン＝アルベルト・アサト（13）も工場で働きながら、その工員代表となって組合活動に参加していた⁶³。フリオ・グシケンと同姓で同じ地域に生まれ育ち、同じ高校に通う友人だったカルロス＝オラシオ・グシケン（17）もまた、ガラス製品工場の工員だった。

5-3 「ハポネス」であること

以上は日系人だけでなく当時のミリタンテ、失踪者一般に共通してみいだされる特徴である。では、日系コミュニティに対して、自身の「日本」という出自に関してはどのような態度がみられるだろうか。前述の崎原は、筆者によるインタビューのなかで、政治活動

59 『3万人のなかの17人の歴史』（前掲）より。

60 「1976年にひげをそり落とした」という。当時、ひげと長髪は左翼やゲリラを象徴するものだった。「あの頃ひげを伸ばしているニホンジン *nihonjin* はひとりも見なかった」と仲村は回想する。

61 仲村実範、2014年3月3日、ブエノスアイレス市、筆者によるインタビュー。彼は5歳だった1952年に家族と沖縄からアルゼンチンに移住している。

62 ウーゴ・グシケン。

63 『3万人のなかの17人の歴史』（前掲）より。

に従事していた日系人どうしても連絡や集まりなどがあったのかという問いに対し、それぞれ別のグループに入って、別々にやっていただろうと答えた。

筆者：では日系人、アルゼンチン人といったことに関わりなく活動していた？

崎原：関わりなく、というよりは、よりアルゼンチン人に近づこうと、アルゼンチンに一心同体になろうとして、活動していたんじゃないかな。…もちろん、多くの二世はそういう活動を避けていました。でもかれら〔失踪者〕は、誤解を受けた人もいるけど、多くは、自ら積極的に政治グループに参加していたはずで⁶⁴。

「よりアルゼンチン人に近づこうと」していたという崎原の見立てが的外れでないことを示す証言は別の失踪者についてもみられる。カルロス＝オラシオ・グシケンについては「15歳の時、日本人社会から離れてしまった」と妹が語っている。父親に押し付けられるように通っていた日本語学校では、教師に叱られるたびに「ここはアルゼンチンで、日本じゃない」と反抗していたという〔移民史2：446〕。カチョ（比嘉勝也）の友人でもあった仲村実範によれば、「カチョは完全に日系社会から離れていた」⁶⁵。タカシという日本名を持っていたオスカル・オオシロについても、彼と親しかったエドムンド・キシモトは、「タカシに“日系社会向けの新聞を発行しよう”と持ちかけていた⁶⁶が、彼はアルゼンチン社会に向けたものを出したがっていた」と証言している〔移民史2：443〕。

これらの証言が間接的に示しているのは、「日本」と「アルゼンチン」の両社会に同時に参加することの困難さである。

あの頃の二世は、今の人たちよりも日本人でなくなろうとしていたと思います。（中略）かれらは別の社会を求めています。その意味で、よりアルゼンチン人だと感じていたんだと思います⁶⁷。

現在の視点からこう語ったのはウーゴ・グシケンだが、ここからも「アルゼンチン人だと感じる」ことが「日本人でなくなる」ことを意味してしまう状況にかれらが置かれていたことが読み取れる。「家族会」に参加する数人が別々に筆者に語ったように、かれらのあいだでは、「失踪者たちはハポネスのなかで最もアルゼンチンに統合していた」という理解がゆるやかに共有されている。ミリタンシアに身を投じること、労働者として生きることは他のアルゼンチン人と同じようにアルゼンチンを生きることである、という理解である。ウーゴは次のように続けている。

当時は独特の政治環境があって、世界中がそうでした。若者はみんなそういうことに

64 崎原朝一。

65 仲村実範。

66 キシモトは1965年から翌年にかけて二世のためのメディアとして月刊誌 *Horisonte*（地平線）を発行していた。

67 ウーゴ・グシケン。

関心を持っていた。共産主義か、資本主義か。アルゼンチンの軍事政府は資本主義を推し進めていて、行方不明になった人たちは、そうではない別の政府を求めて活動していました⁶⁸。

言うまでもなく、このような「別の政府」を求めて多くの若者が政治に身を投じたという環境はアルゼンチンに限られない。ブラジルの軍政（1964～85年）初期に都市ゲリラ組織で活動した日系二世の「マリオ」（暗号名）の1970年のインタビューを引用しよう。

ブラジルの日本人・日系人社会は概して政治には無関心だが、そうでない人たちは日系ゲリラを〈日本の恥〉と受け止めているようだ。だが私たちはブラジル市民として闘っているのであり、日本や日本人社会と結びつけて考えるのは無意味です。

（中略）[ブラジルのゲリラの思想は] 一口で言えば、ブラジルを良くするためという民族主義だ [伊高 2010: 228]。

この語りにおいては、「市民として」の政治闘争が「民族主義（ナショナリズム）」とほぼ同じ意味を持ち、それが「日本」との結び付きの否定につながっている。活動の目的がアルゼンチン（あるいはブラジル）というネーションの名で示されるからこそ、日本や日本人たちのコミュニティ、すなわち別のネーションと結びつけて考えることが「無意味」、あるいは困難なのである。

075

5-4 別の社会、別のアルゼンチン人

1959年のキューバ革命の影響を多分に受けていたこの世代の若者たちの多くにとって、ハポネスとしての良好なイメージを侵犯せず既存のモデルを再現することよりも、より公正な、オルタナティブな社会を求めてアルゼンチン人として思考し行動することこそが重要だった。しかし、日系失踪者たちにとっての政治は、抵抗の対象としての「虐殺の体制」と同じネーションの名で理解すべきものだろうか。

この問いに答えるには、フアン＝カルロスの振る舞いに再度注意を払う必要がある。すでに挙げたエピソードからわかる通り、彼は日系コミュニティから離れるのではなくむしろ積極的に参加していた。当時、大学のグループを通じて学生運動に参加しつつ AJA 青年部に属しコミュニティ活動にも従事していたアルベルト・オナハは、邦字紙記者のフアン＝カルロスと一緒にコミュニティの文化イベントを企画するなど親しくしていた。そして2人は「よく議論した」という。「コミュニティがこのまま保守的で閉鎖的なのはよくない、という話で盛り上がったよ」⁶⁹。また、フアン＝カルロスの姉のマリアによれば、彼が新聞社に入った動機は「両親たちの日本人社会とアルゼンチン社会を結びつけるものを確立しようという望みを持っていたから」だった [移民史 2: 444]。フアン＝カルロスは『亜国日報』の記者で

68 ウーゴ・グシケン。

69 アルベルト・オナハ。

あるだけなら必要のないプロの新聞記者証を取得していたが、この事実は、彼の関心が日系コミュニティのみに向けられたものでなかったことを示しているだろう。一ジャーナリストとしての彼の失踪は、ブエノスアイレス記者協会が編纂した『かれらの生還を求む——行方不明のジャーナリストたち』でも取り上げられており、同書には彼が「日系コミュニティのアルゼンチンへの統合を模索していた」[Asociación de Periodistas de Buenos Aires 1986: 104]と記されている。このようにフアン＝カルロスは、「日本」か「アルゼンチン」というネイションの排他性に陥るのではなく両者を結びつける道を探していた。

しかし、コミュニティの閉鎖性を批判し、非政治的主体であれという規範を破った彼にとっての「コミュニティのアルゼンチンへの統合」は、虐殺の体制としてのアルゼンチン・ネイションへの「統合」と同じものであるはずがない。また、「ハポネスのなかで最もアルゼンチンに統合していた」という親族たちの理解における「統合」の意味も、国家の呼びかけに応え国民として主体化することへの抵抗によって示されるものである。濃密な過去の記述を試みる私たちは、同じ名、同じ単語で示されるものが発話者や立場、行為によっていかに異なっているのかを見極める必要があるだろう。

「別の社会」「別の政府」を求める政治思想は、武力闘争を行うゲリラと、非武装の政治運動家とのあいだに共通していた。その意味で、ゲリラとミリタンテの差は、その思想を共有しない者たちにとってごくわずかなものだったかもしれない⁷⁰。日系コミュニティにおいて「失踪者」が「ゲリラ」「犯罪者」に直結したのは、それらがナショナルな体制にとって同じ否定的価値を持ったからである。今あるものとは別の「アルゼンチン」をもたらそうとする政治的行為者という点で、非武装のミリタンテとゲリラ兵は、文字通り「国家転覆」の可能性を持っていた。「何か理由があるのだろう」というフレーズの「何か algo」とは、若者たちにとってはより公正なアルゼンチンを求める左翼思想だったが、その思想が、失踪者の犯罪性を示唆し政府と社会の責任を回避するロジックのなかでは「国家転覆活動」「反乱分子」を意味した。

しかし両者の違いは、理想とするアルゼンチン社会や政府の違いだけではないようにも思える。一方が、異を唱える個人の存在を消すことで社会を統治する虐殺の体制としてのネイション再編を目指したとするなら、他方は、個人の存在を消すという方法が正当なものとしてまかりとおるようなネイションの統治そのものを否定していると言える。みたびウーゴの証言を借りれば、「かれら [失踪者] は保守的な、ナショナリスト的な政府を批判していたんです。文化的な意味で日本を否定していたのではない」。つまり多くの失踪者がコミュニティの外に出なければならなかったのは、コミュニティが「対転覆活動戦争」の体制に翼賛的な国民を、「モデル・マイノリティ」を自発的に生み出す装置として機能していたから、社会を変え、別の社会をつくるための「政治」をコミュニティが禁じていたからである。

そうだとすれば、フアン＝カルロスの目指した「アルゼンチン社会への日本人社会の統合」は、社会を自らの思想と行動によって変え得るものとし、細長い目や「勤勉」の美德

70 仲村は自分の政治運動を家族には全く話さなかったと言う。「話しても理解されると思わなかった。『ゲリラに同調するなんてどういうこと!』というのがたいがいの反応だった」。

によって全体化されるのではない個人としてのハポネス／アルヘンティーノの位置を自らつくりだす社会参加であると言える。また、「かれらは自分たちをよりアルゼンチン人であると感じていた」と語られる時の「アルゼンチン人」も、軍事評議会の言う「ネーションの再編」を真つ向から否定する。かれらは、「アルヘンティーノ」も「ハポネス」も国家とコミュニティのイデオロギーが示すモデルの単なる再現ではなく、「不安定ながら他者に語りかけるエージェント」[田中 2002: 349]であり得ることを示しているだろう。言い換えるなら、コミュニティの規範に反しアルゼンチンを変えるための政治的行為に身を投じることは、日本という出自を否定することではなく、政治的、社会的な個人を否定（抹消）することで安全が保障される「良きアルゼンチン人＝良き日本人」の生を拒否することであり、そうした安全保障を提示するナショナルな統治に対抗する自己を提示することに他ならない。コミュニティから離れた失踪者たちとコミュニティに関わり続けたファン＝カルロスとの差異は、出自の問題としてコミュニティに内部化された問題を「アルゼンチン」に突きつけるという抵抗的振る舞いにおける方法の違いでしかない。

6 おわりに

政治に関わるなというコミュニティの命令は、「なぜならお前は日本人だから」を理由とする以上、一人のハポネスの行為がハポネス全体の行為に置き換えられてしまう国民的同一性の論理の内側にある。その命に背いたかれらの政治とは、個人を国民に媒介する装置としてのコミュニティもろとも国民社会を変えるための手段だった。さらにそれは、社会主義や左翼思想の意味での政治であるのみならず、個人の政治的空間を消してしまうことのない社会を目指す方法だったのではないだろうか。「失踪」にいたったかれらの行為は、移民という出自の個人的問題を政治的な場に折り返すコンタクト・ゾーンを開いている。「失踪」の事実を含めたかれらの行動についての語りを通じて、現在の私たちはこのように理解できるだろう。

軍政期の暴力を「二度と繰り返してはならない」という認識が拡大し、人権がより尊重される社会になったと言える今でも、失踪者の話題に触れまいとするコミュニティのタブーは解かれ切っていない。しかし、失踪者の近くにいた人々、「失踪者になっていてもおかしくなかった」⁷¹ 人々、そして自分が生まれる前の語られない過去を知り関わろうとする新しい世代の人々が、失踪者について黙さず語ることによって、「日系失踪者」たちを現前させている。そのときに「日系（ハポネス）」の名を外さないのは、アルゼンチン人との差異によって社会に位置づけられる一元的なハポネスとは別のハポネスがあり得ることや、そうした政治的なハポネスを含むアルゼンチン社会を模索していることの表れではないだろうか⁷²。濃密な記憶の回復とその記述はコミュニティの内側からも進められている。

71 仲村実範。彼は自分自身がそれにあたると言う。

72 軍政期から現在までの「家族会」の経緯とその活動に関する日系コミュニティの態度、変化については稿を改めて論じたい。



写真1 日系社会失踪者家族会が作成し使用している横断幕（筆者撮影）

<謝辞>

本稿はJSPS 科研費 25884081（研究活動スタート支援）、25243008（基盤研究（A）分担金）、14J08713（特別研究員奨励費）の助成を受けた研究の成果である。記して謝意を表したい。

<参考文献>

- 阿部利洋 2008 『真実委員会という選択——紛争後社会の再生のために』岩波書店。
- アルゼンチン日本人移民史編纂委員会・社団法人在亜日系団体連合会編 2006 『アルゼンチン日本人移民史 第二巻 戦後編』社団法人在亜日系団体連合会。
- アルチュセール、ルイ 1993 「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」柳内隆訳、ルイ・アルチュセール・柳内隆・山本哲士共著『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社、pp.7-111。
- 石田智恵 2013a 『〈日系人〉の生成と動態——集団カテゴリーと移民コミュニティの歴史人類学』立命館大学大学院先端総合学術研究科、2012 年度博士論文。
- 2013b 「集団の名、集団の顔——アルゼンチンの社会変動と「ニッケイ」」天田城介・角崎洋平・櫻井悟史編『体制の歴史——時代の線を引きなおす』洛北出版、pp.431-482。
- 伊高浩昭 2010 「ブラジル民主の礎に日系ゲリラ——ルーラ大統領の再選と許し難い与党 PT の腐敗」『ラ米取材帖』ラティーナ、pp.223-232。
- 宇佐見耕一 2011 『アルゼンチンにおける福祉国家の形成と変容——早熟な福祉国家とネオ・リベラル改革』旬報社。
- 内田みどり 2013 「ウルグアイにおける歴史の政治的利用：軍政の責任をめぐって」『法政理論』45(3): 160-175。
- クライン、ナオミ 2011 『ショック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く

- (上)』幾島幸子・村上由見子訳、岩波書店。
- 酒井直樹 1996 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史-地政的配置』新曜社。
- 坂口満宏 2001 『日本人アメリカ移民史』不二出版。
- 佐野誠 2009 『「もうひとつの失われた10年」を超えて——原点としてのラテン・アメリカ』新評論。
- 杉山知子 2002 「民主化期アルゼンチンにおける政軍関係と国際環境の影響」『文明』2:77-83。
- 2007 『国家テロリズムと市民——冷戦期のアルゼンチンの汚い戦争』北樹出版。
- 2011 『移行期の正義とラテンアメリカの教訓——真実と正義の政治学』北樹出版。
- 田中雅一 2002 「主体からエージェントのコミュニティへ——日常実践への視角」田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社、pp.337-360。
- 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』001:31-43。
- 中野徹三 2002 「「ローマ条約」の早急な批准と「人道に対する罪」の法制化を——拉致被害者の救済のために」『唯物論』47:24-33。
- 林みどり 1998 「接触と領有——アルゼンチンの近代化過程における言説の政治」東京外国語大学大学院地域文化研究科、1998年度博士論文。
- 2009 「管理社会と親密圏——「五月広場の母たち」における政治的ポテンシャルティ」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』11:85-96。
- 比嘉マルセーロ 2003 「「私はアルゼンチン人です」——20世紀のアルゼンチンにおける日本人移民の下位世代のことばとアイデンティティ志向の形成をめぐる一考察」『移民研究年報』9:57-92。
- 2010 「鉛色時代の音楽——独裁政権下（1976-83）のアルゼンチン・ロック」石橋純編『中南米の音楽——歌・踊り・祝宴を生きる人々』東京堂出版、pp.229-255。
- ヘイナー、プリシラ・B 2006 『語りえぬ真実——真実委員会の挑戦』阿部利洋訳、平凡社。
- ホソカワ、ビル 1984 『120%の忠誠——日系二世、この勇気ある人びとの記録』猿谷要（監修）、飯野正子・今井輝子・篠田左多江訳、有斐閣。
- 細谷広美 2013 「人権のグローバル化と先住民——ペルーにおける紛争、真実委員会、平和構築」『文化人類学』77(4):566-587。
- 松下 洋 2010 「市民社会は民主主義の進展に寄与するのか？——アルゼンチン「五月広場の母親の会」の事例から」加茂直樹・初瀬龍平・南野佳代・西尾久美子編『現代社会研究入門』晃洋書房、pp.70-84。
- ロサリオ日本人会 1975 『ロサリオ日本人会沿革史』ロサリオ日本人会。

- Ameztoy, María Virginia 1998 Autoritarismo, sociedad y Estado en la Argentina. Inéz Izaguirre (coord./ comp.), *Violencia social y derechos humanos*. Buenos Aires: Eudeba/ Biblioteca virtual de CLACSO, pp.228-244.
- Andersen, Martin Edwin 1993 *Dossier Secreto: Argentina's Desaparecidos and the Myth of the "Dirty War"*. Boulder, Colorado : Westview Press.
- Asociación de Periodistas de Buenos Aires 1986 *Con vida los queremos: Periodistas desaparecidos*. Buenos Aires : Asociación de Periodistas de Buenos Aires.
- AUN (Asociación Universitaria Nikkei) 1990 *La otra inmigración*. Buenos Aires : AUN.
- Barros, Mercedes María 2009 El silencio bajo la última dictadura militar en la Argentina. *Pensamiento Plural/ Pelotas* 5: 79-101.
- Bouvard, Marguerite Guzman 1994 *Revolutionizing Motherhood: The Mothers of Plaza de Mayo*. Lanham, Maryland : SR Books.
- Britez, Rafael y Nestor Denza 2012 *Los pibes del Santa: Represión estudiantil en Florencio Varela (1976-1983)*. Universidad Nacional de Quilmes Editorial. 2a edición. (=2007 1a edición).
- Caggiano, Sergio 2005 *Lo que no entra en el crisol: Inmigración boliviana, comunicación intercultural y procesos identitarios*. Buenos Aires : Prometeo.
- CONADEP (Comisión Nacional sobre Desaparición de Personas) 2003 *Nunca Más*, 8ª edición. Buenos Aires : Eudeba (=1984, 1a edición)
- Crenzel, Emilio 2008 *La hisotia política del Nunca Más*. Buenos Aires : Siglo XXI.
- Devoto, Fernando 2003 *Historia de la inmigración en la Argentina*. Buenos Aires : Sudamericana.
- Duhalde, Eduardo Luis 1983 *El estado terrorista argentino*. Barcelona : Argos Vergara.
- Elias, Diego Aldouin 2010 Rediscovering the "Disappeared". *Dispatches International*, May 23, 2010. <http://www.dispatchesinternational.org/?p=156> (2014 年 8 月 30 日最終アクセス)
- Endoh, Toake 2009 *Exporting Japan: Politics of Emigration toward Latin America*. Urbana and Chicago : University of Illinois Press.
- Feinmann, José Pablo 2005 Los de afuera y los de adentro: Democracia y proyecto nacional. In José Nun comp., *Debates de Mayo: Nación, cultura y política*. Buenos Aires : Gedisa, pp.111-116.
- Franco, Marina 2011 Huecos de la memoria y silencios políticos. In Gabriele Andreozzi coord., *Juicios por crímenes de lesa humanidad en Argentina*. Buenos Aires : Atuel, pp.253-265.
- Gómez, Silvina 2011 La colectividad japonesa en Argentina: entre la invisibilidad y el Obelisco. *X congreso Argentino de Antropología Social, Facultad de Filosofía y Letras- Universidad de Buenos Aires*. Buenos Aires : UBA, pp.1-19.
- Grimson, Alejandro 2000 *Interculturalidad y comunicación*. Buenos Aires : Grupo editorial Norma.
- 2006 Nuevas xenofobias, nuevas políticas étnicas en la Argentina. In Alejandro Grimson y Elizabeth Jelin comps., *Migraciones regionales hacia la Argentina: Diferencia, desigualdad y derechos*. Buenos Aires : Prometeo, pp.69-97.

- Guber, Rosana 2001 Adopción, filiación y el fracaso de la reciprocidad: El respaldo de residentes extranjeros en la Argentina a ‘la recuperación’ de las Islas Malvinas en 1982. *European Review of Latin American and Caribbean Studies* 71: 3-23.
- Hilb, Claudia 2010 *Usos del pasado: Qué hacemos hoy con los setenta*. Buenos Aires : Siglo XXI.
- Partnoy, Alicia 1986 *The Little School: Tales of Disappearance and Survival*. San Francisco : Cleis Press.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London : Routledge.
- Segato, Rita Laura 2006. *La nación y sus otros: raza, etnicidad y diversidad religiosa en tiempos de políticas de la identidad*. Buenos Aires : Prometeo.
- Sikkink, Kathryn 2008 From Pariah State to Global Protagonist: Argentina and the Struggle for International Human Rights. *Latin American Politics and Society* 50(1): 1-29.
- Timerman, Jacobo 1980 *Preso sin nombre, celda sin número*. Barcelona : El cid.
- Verbitsky, Horacio 1995 *El vuelo*. Buenos Aires : Planeta.
- Vezetti, Hugo 2002 *Pasado y presente: guerra, dictadura y sociedad en la Argentina*. Buenos Aires : Siglo XXI.
- Williams, Brackette F. 1989 A Class Act: Anthropology and the Race to Nation Across Ethnic Terrain. *Annual Review of Anthropology* 18: 401-444.
- Yúdice, George 2003 *The Expediency of Culture: Uses of Culture in the Global Era*. Durham, North Carolina : Duke University Press.

La colectividad and the Japanese Disappeared people under the Regime of Military Junta in Argentina

Chie ISHIDA

Keywords: Argentina, Military regime, disappeared people, immigrants, Japanese community

This paper focuses on the situation of Japanese immigrants and their descendants, as well as their community in Argentina, within the context of Argentina’s military junta in the late 1970s, especially its method of repression: the disappearance of people. I approach this topic by considering Argentine national society under the regime named “National Reorganization Process” as a contact zone between *argentinos* and *japoneses*.

The Military Junta built in March 1976 declared an “anti-subversive war”; as the central

operation of that, they abducted a large number of people estimated or labeled as “subversives” to torture them clandestinely and simultaneously denied their conduct of repression by designating the detained people as the “disappeared”. Other people had to choose not to speak about what was happening in order to escape from this operation. This methodology ruled the whole national society by the fear of disappearing, which had the effect of silencing counter action and of eliminating the contact zone along with the people.

Within the Japanese immigrant community called *la colectividad* a normative order had been established over the members to maintain a common positive image toward Japanese among other Argentines, such as “honest”, “not criminal” and “low profile”. In order to do that, the Japanese immigrants were ordered not to engage in politics. This order resonated with that of the military government. In this way *la colectividad* had filled the role of an apparatus of producing a model minority, which supports the military regime.

Most second-generation Japanese in that period tended to feel those community orders as oppression. Among them, those who had sympathized with the leftist thought chose to leave the community to participate in political activities against the Japanese-national norm. Some of these activists have *disappeared*, but we can approach their thoughts and conducts by listening to their families and friends who are willing to break the silence. The politics for the disappeared *japoneses*. can be understood as a way of criticizing the national and community regime built over the elimination of individual political space and searching for an alternative society which would not totalize them under the name of Japanese.